

アジア・アフリカ言語文化双書 2

イブン・ファドラーンの
ヴォルガ・ブルガール旅行記

家 島 彦 一
訳 註

アジア・アフリカ言語文化研究所

東京外国語大学

1969

イブン・ファドラーンの

ヴェオルガ・ブルガール旅行記

訳註

家島彦一

THE

RISĀLA OF IBN FADLĀN

TRANSLATED BY

HIKOICHI YAJIMA

The Institute for the Study of Languages
and Cultures of Asia and Africa
Tokyo Gaikokugo Daigaku

1969

والخيارواكم واحولهم كثيرا من لوهم ٥ قال احمد بن فضلان وصلنا ليل السبت
بالحوار مكانا الصقاليه الى امير المؤمنين المقتدر ويسله فيه البعثة اليه من ينفذه في الدرس
ويصرفه شرايع الحرام وبنى له مسجدا ويصحب له شبرا يقيم عليه الدين في داره
وهو جمع مملكته ويسله بالخص من يخصص فيه من الملوك الخالفين له الجيب الى مال من
ذلك كان الصغير فيه مذبر الحرمى فندت انا لقراءة الكتاب عليه وتسليم ما اهدت
اليه ولا شرف علي الفتن والمعلمين وسبب له المال الحول اليه لئلا ياكرا الهجره
على لفتها والمعلمين على الخبيثه المعروفة بالخطيبين من ارض خوارزم من ضياع
ابن افراس وكان الرسول الى المقتدر من صاحب الصقاليه وطلبه له عبد الله من
باشقرو الخواري والرسول من جنتا اسلاطان سوسل الى موسى بن نزل الحوي وكين
الترك وبادر الصقالي وانا اناهم على ما ذكرت ملكك اليه الهرايه وكلماته ولا
ولاه والوقت وقوله واديه كان كسب الى توبير طلبها فوجدنا من ربه العلم يوم
الجسر لحدود عشرة ليلة خلت من صر سنة سبع وثلاثا فاقفنا بالظهر وازرع واحدا و
وجدنا محطرين حتى واقفنا الدركه فاقفنا ثالثة ايام ثم دخلنا فاصدر من لكون على
نحى صرنا الى حلو ان فاقفنا بامويين صرنا منها الى قوسيين فاقفنا بامويين ثم دخلنا
فصرنا حتى وصلنا الى زان فاقفنا بها ثلثه ايام ثم صرنا حتى قريتنا ساد فاقفنا بها يومين
ومنها الى امير فاقفنا بها احدى عشر يوما تنتظر احمد بن محمد الخاص لكون لا نه كان حوار
الدهى ثم دخلنا الى حوار الى قوس فاقفنا بها ثلثه ايام ثم دخلنا الى صمنان ثم منها الى الدار الحان
يزداد فابا نوافر من قبل الدار في شكرنا فاقفنا ثلثه ايام وسرنا فخر من حتى قريتنا نيسابور
فقد قلنا لى نغادر فاقفنا بها مجموعا كوسا صاحب جيش شرا لينا ثم دخلنا الى

الملك وجناته ناول على ان يقول ليخبره هي ثلثه بحيرت منها اثنتان كان رو
 احده صغيرا لان السبع جميعها شي على غنوم وبين في الاضع ومن لم يعلم
 يتبعها الى بلاد الخبز يقال له نرا ثلثه خول الفرس على هذا القدر وضع سوف
 تنور في كل مدينة وبيع فيها المتاع الكثير القيس وكان تانور في ان
 في بلاد الملك وجل عظيم الخول جعل قاصدا صرنا الى الدار سال الملك نه فقال
 نعم قد كان بلدنا ومات ولم يكن لاهل البلد من الناس ايضا وكان خب
 ان توامن التجار يجرى الى نهر اناك حاصرون وهذا النهر بعد وطنا ما و
 فلم اشعر بوابا وقد فاني حاصره من النصار فقالوا ايها الملك قد تقاعنا
 وحل ان كان من ليقرب منا فالا حكام لنا في هذه الديار وليس فينا القوم
 فوكبتهم حتى صرنا الى النهر فاذا انا بالرجل والاهو بدوا على اننا عثر
 واذا انا له اسير ما يكون من القادروا اننا اكثر من شين وخينا عظيمنا ان ما خرج
 القوم من شين شين فخرجوا من وداخلي ما دخل القوم من الفرع واقبلنا نيكه
 ولا يكملنا الا ينظر ايننا نخلته الى كافي وكنت ان اهل ويسوا دم منا على
 اشهر اسلمهم فكتبوا التي يترقون في ان من انا الرجل من لوج وملجوج وهم
 حاصري ثلثه اشهر عراة حول بيتنا وبينهم البحر منهم على حله وهم مثل البهايم
 بعضهم بعضا اخرج الله على كل دم سكة من البحر على البحر منهم وهم
 لم يره تحسب منها فاد ما يكتبه ويكني عياله فاني لفرقون ما يفتهم اشتكا وجنه
 وكذلك عياله يشكون فيهم وروايات وما توابا سم فاذا انا ونام
 استلبت ورفعت في البحر فخرجهم كلهم على ذلك وبيتنا وبينهم البحر من حجاب

والجمال يحيط بهم من جوانب اخروا الدار ايضا قد سال بينهم وبين الباب الذين
 كانوا يخرجون منه فاذا اراد الله عز وجل ان يخرجهم الى المعالم سبب لهم فتح الد
 ونصب البحر وانقطع عنهم السيل قال فسالت عن الرجل فقال اقام عدي من
 فلم يكن ينظر اليه صبي الا مات واكمل الى طحنت حلقها وكان ان كان من الناس
 عهده بيده حتى تنقله فلما رايت ان علقته في شجر عالية حتى ات الى الد
 ان تنظر الى عظامه ورأسه حشيت معاك حتى تنظر الى طحنت انا والله احب قال
 فوكبت حتى لا يخبره كبير فيها شجر عظام فقد في لي شجر
 ورأسه تحته فرايت رأسه مثل التقدير الكبير واذا اضلعه مثل اكل عرجل الفل
 وكذلك عظام ساقية وذراعية فتجست منه والضرقت قال وارحا الملك
 من انا الذي يسي خطه الى نهر يقال له حاصير فاقام به شهر ثم اراد اهل
 فبعث الى نهر يقال له سوان يا مريم يا رجل معه فابو عليه وانترقوا فترقوا في
 مع حسنه وكان قد ملك عليهم واسم وبعث اليهم الملك وقال ان اسعد
 قد من على بالاسلام وبرالة امير المؤمنين فانجدوه وهذا الا
 خالني ليقته بالسيف وكانت الفرقة اخرون مع ملك من قبيلة يقرع من
 اسكل وكان طلقه لانه لم يكن لفرقة الاسلام فلما رجع اليهم هذه الرسالة
 خافوا اناجيه فدخلوا يجمعهم معه الى نهر حاصير وهو نهر قليل العروق على
 خمسة اذرع ومات الى النهر وفيه مواضع الى التوفو والكنق تاءه وحوله شجر
 كثير من الشجر لذلك وعذبه وبالقرب منه صحرا واسعة يذبحون
 الفرج ما حاداه في نهر الكبر ونور النور واسم واسجل وزنه ذنبه ثور

بولوب

19世紀の初頭以来、イスラームの地理・旅行書を根本史料としたイスラーム史の研究は、ヨーロッパ、とくにフランスのイスラーム学の主流となり、M. Re naud, M. de Slane, F. Wustenfeld, V. Barthold, I. Krachkovskii, J. de Goeje, G. Ferrand といったすぐれた学者が輩出した。従って、Ibn Khurdadbeh, Mas'udi, Idrisi, Abul'Fida' などの代表的な地理書は、逸早く翻訳され、研究者達に広く利用されてきたのである。

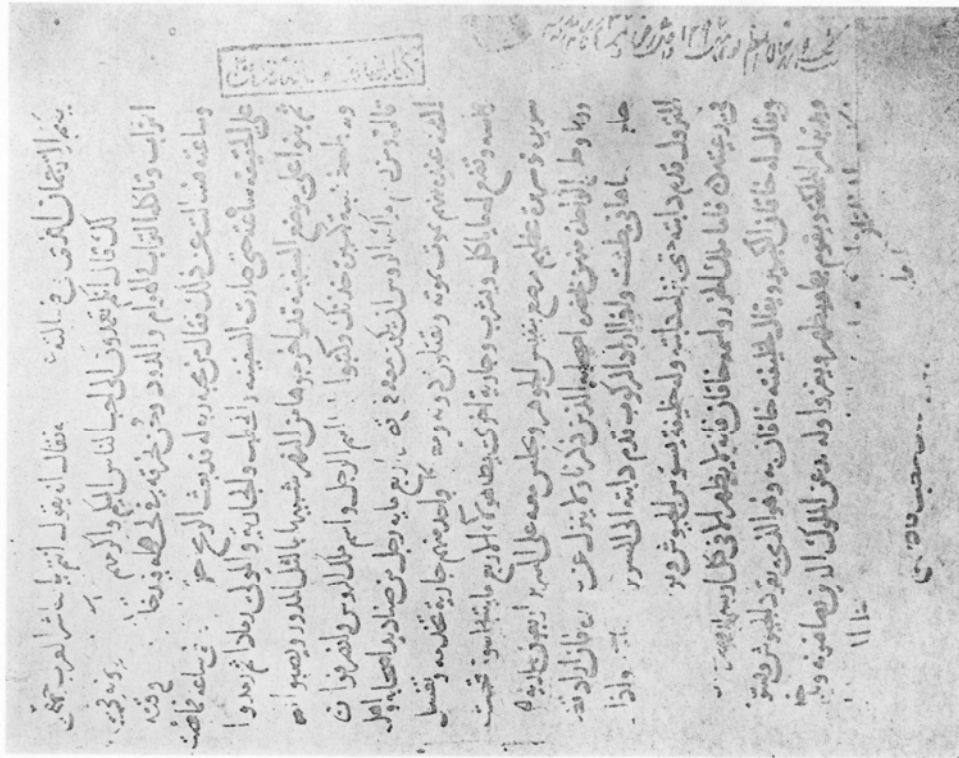
ところが、そうした従来のイスラーム地理書によった研究の中には、思わぬ誤解と誤った結論に行きついたものが屢々見受けられる。それは、イスラームの地理・旅行書そのものについての研究——地理書に共通する性格、特異な地理概念、原典批判などの問題が、ほとんど等閑に付されてきたため、と考えられる。

私は、イスラームの地理・旅行書を信憑性のある歴史史料として還元するためには、(1)厳密な原典批判、(2)イスラーム地理概念の解明の2点が不可欠であって、しかもその両者はそれぞれ別箇の問題としてとらえられるのではなく、つねに相互に関連づけの上で理解されるべきもの、と考えている。

正確な地理的知識——とくに未知の辺遠地域に関しての知識が得られたとき、その知識が理解され、選択・記述されるためには暗黙のうちに新事実と既知の地理概念との対応がなされなければならない。従って、記述された純然たる事実にも、ある一定の概念が働いていると考えられるのである。言い換えるならば、文献学的研究と概念論の究明は、かならずしも独自に存在するものではなく、両者を共通の場で論じることが可能ではないだろうか。否、両者を相互的に究明することから、従来の考証史学の欠を多少とも補い得る研究分野が開けるのではないだろうか。以上の点が私の研究意図としていっている点である。

このところに『イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記』の取註を試みた目的は、以上のべた点を具体的な問題に照して検討してみることにある。多くの地理書に引用された、このブルガール旅行記がイスラーム教徒達の抱く北方地理概念の形成にどのような役割を演じたのか、Yāqūt, Qazwini などの地理学者は、ブルガール旅行記をどのような基準で選択・記述したのか、などの研究テーマのための、謂わば予備的な作業と言えよう。

浅学・非才の恥をさらすことは明らかであらうが、この一応の成果を1年、2年後に再検討し、多少とも自らの不備を批判し、訂正出来る点を見出したならば、それこそ愚鈍なものなりの確かな努力の軌跡であり、大きな喜びに違いないと思い、あえてここに小冊子にまとめて



fol. 212 b.

提出する次第である。先学諸先生方の殿しい御叱正と御指導をいただきたく切に望んでいる。
最後に、このような未熟な訳註を《アジア・アフリカ言語文化双書》の第2巻として取上げ
て下さった研究所の諸先生方の御厚意に對して心からお礼を申し上げます。

なお、この訳註をおこなうにあたって、慶応義塾大学博士課程に在学中の岩見隆氏にはひとかたならぬ
御世話になった。記して深く感謝の意を表したい。

1968 年 盛 夏 研究室にて

家 島 彦 一

目 次

はじめに.....	i
解 説.....	iv
地 図.....	xii
本 文	
I 序 言.....	1
II バグダード〜ジュルジャーニーヤ.....	5
III トルコの諸部族について.....	19
IV サカーリバ国について.....	37
V ルース族について.....	67
VI ハザル国について.....	82
本文 索引.....	87

1. イブン・ファドラーンの『Risala』

本訳は、マッシュハド写本を底本とした所謂『イブン・ファドラーンのヴェルガ・ブルガル旅行記』(以下、これを『Risala』¹⁾と略す)の全訳である。

10世紀の初頭、ヴェルガ河とカマ河の河間地帯を中心として国家の版図を拡大しつつあったブルガル国²⁾は、トルコ系国家ハザル Khazar との従属的関係を断切って、国家の安寧と繁栄を図るために、イスラーム教を国家政策上の基盤とし、アッバース朝カリフの政治・経済面での支援を得ることに努めた。そうした意図のもとに、ブルガル国国王アルミシュ・ブン・ヤルトワール Almiş b. Yaltwar は、一使者をバグダードに向けて派遣した。とき、バグダード・カリフ、ムクタディル・ビラーフ Muqtadir bi'llah (西暦 908~932 年在位)は、ブルガル王のこの要請に答えて、ナジール Nadhir のマウラー、スーサン・アル・ラッシー Susan al-Rassi を代表とした使節団を送った³⁾。使節一行は、ヒジュラ暦 309 年サファル月 11 日 (西暦 921 年 6 月 21 日)、バグダードを出発、中央アジア方面に到るアッバース朝の東幹道《ボラーサーン街道》を通過して、ボハラ Bakhara を経、カスピ海とアララ海との間に続く平原地帯を北上、310 年ムハラム月 12 日 (西暦 922 年 5 月 12 日)にヴェルガ河畔に近いブルガル王の野営地に到着した。

『Risala』は、その使節の随員の一人で随行者全員の監督、カリフ書簡の朗読、ブルガル王との会談・折衝などの重要な役目を担っていた、イブン・ファドラーン Ahmad b. Faqlan b. al-Abbas b. Rashid b. Hamad によって語られた《報告書》⁴⁾である。

2. イスラーム地理書としての『Risala』の価値

10, 11 世紀の東カリフ世界やアララ・カスピ海の周辺地域は、バグダード・カリフから離反した地方政權の抬頭、トルコ系の諸部族——グズ Ghuzz 族、ベチュネグ Bajnak 族、バシキール Bashghird 族などの移動、ヴェルガ河に沿って南下するスカンジナビア・ルース Rus 族などによって、非常に複雑な様相を呈していた。まさにそうした状況下の地域を通過の途、バグダード使節一行が直接遭遇し、見聞した事柄を報じたものとして『Risala』は、10世紀初頭のトルコ族や東欧諸国の研究に一支柱となっていることは言うまでもない。

以上のように歴史史料としての価値は勿論のこと、『Risala』はイスラーム地理書として重要な価値があることを指摘しなければならぬ。

一般的に見て、9~15 世紀のイスラームの地理・旅行記は、時代・方法・情報提供者を異にして獲得された種々雑多な地理的知識が蒐集され、体系化されたものであると言える。しかし、時代を異にした数種の地理・旅行書の中に見られる類似の知識を総合的に比較・校合して見ると、底々にしてそれら知識は系統化され、あるものは過去の一時点に獲得された知識へと直線的に廻ることが可能となるのである。この事実が、漠然としていた、とくにイスラームの辺疆地帯・部族に関する地理的知識が、ある特定の歴史事件、たとえば遠征や使節の交流などをきっかけとして次第に増大していったことを物語っていると言える。

以上の点を念頭に置いて、カスピ海周辺や東欧諸地域に関するイスラーム初期の地理的知識を分析してみると、次のような 3 つの連った地理書の知識系統に大別することが出来る⁵⁾。

- 1) Ibn Khurdādhbih, 『al-Masālik wa'l-mamālik』; Ibn Rustah, 『Kitāb al-a'lāq al-nāfisa』
- 2) Iṣṭakhri (Ibn Hawqal), 『al-Masālik wa'l-mamālik』; 『Hudūd al-'ālam』
- 3) Ibn Faqlan, 『Risala』

そして、以上の中でもイブン・ファドラーンの『Risala』は、後代の多くのイスラーム地理学者達によって直接・間接的に引用され、Yāqūt, Qazwini, Ahmad al-Tust, Amin al-Razi などによる確実な引用記事によっても現存のマッシュハド写本『Risala』をかなりの部分まで復原することが出来る。以上の点から考えて、イブン・ファドラーンら一行がブルガル国を訪れた際に蓄積した情報は、イスラーム地理学者達の描く北方地理概念の形成に多大な影響を与えた、と言える。この点に確かな論拠を与えるためには、イスラームの地理・旅行書の中に見られる北方知識を厳密に比較・校合して、イブン・ファドラーンに依ったと思われる知識の影響関係を見出すことが必要となる。『Risala』の訳注は、以上のような原典批判を中心とした『Risala』研究の第一歩として試みられたものである。従来、イスラームの地理・旅行書は、イスラーム史研究の基礎史料として広く利用されてきた。しかし、それらの原典批判についての研究は、比較的等閑に付されてきた分野であって、今後の研究に俟つところが大いと言えよう⁶⁾。

3. マッシュハド写本について

『Risala』は、従来、Yāqūt の地理辞典『Mu'jam al-buldān』の中の Itil, Bashghird, Bulghar, al-Khazar, Khuwārizm, Rus の 6 項目と Qazwini の書『Āthar al-bilād wa-akhbar al-'ibād』の中の Bilād al-Rus, Khuwārizm, Shiqab の 3 項目の中に見られる断片的な引用文を通じて、その存在が知られていたが、1923 年、トルコの学者 Zeki Validi Togan はイランのマッシュハド Mashhad において、3 種類のイスラーム地理書が含本された写本の中に『Risala』の一部を発見した⁷⁾。マッシュハド写本は、極めて逸脱・増減した箇所が多く、誤字に満ちている上、後

半部分、つまりハザル国に関する説明で急に途切れた不完全な写本である。しかし現存する唯一の写本であって、その文献学的重要性については改めて強調するまでもない。写本からはその筆写年代、写字生の名は全く明らかでないが、写本の随処に見られるアラビア文法上の誤り、写字の特長などから判断して、アラビア語にはあまり習熟していないベルシヤ人の手によって写されたものに相違ない。マッシュハド写本の特長については、V. Minorsky の『Abu Dulaf Mis'ar ibn Muhallil's travel in Iran』(Cairo U.P., 1955) に詳しいので、此処では同写本によって知られる『Risala』の性格の一面について簡単に考察しよう。

- 1) 次のような特殊な表現法がしばしば使われる(イタリアクックの部分)。
raḥānā qāšidina lā nālci 'alā šuy'in ḥattā (...めざしてだひたすら旅をする)
'alā qadri 'l-mālī (財産の限り)

lā ya'riḍu li'l-dabbati bi wa'jhin wa lā sababin (馬に対しては決して何んの手だしもしない)

- (2) qāla Ibn Faḍlān (イブン・ファドララーンは語った), または qāla (彼は語った) なる言葉が文中頻繁に挿入されており, いわばイブン・ファドラーンから直接口述筆記された形式をとどめている。
- (3) 全体に断片的記事が多く, 会話文が多く見られる。
- (4) 類似の記載が反復して見られる。とくにグズ・トルコ族とルース族の記載内容にはほぼ共通した箇所があって(両族の死者埋葬方法, 病人に対する処理法, 罪人処刑法など), この点は, イブン・ファドラーンの記憶自体に混乱があったことを示していると思われる。

以上の諸点から判断して、マッシュェハド写本『Risāla』は、バグダード・カリフに報告するための、特に特別に作成された『報告書』とは言い難い。この点に関して、A.П. Ковалевскийは、マッシュェハド写本はボハラで記された省略本であると主張しているが⁹⁾、私は、私は、使節の帰還の途中、おそそくらくサクママン朝のワジールの側近の一人によって、イブン・ファドラーンから直接口述筆記されたものであろうと推している。Yāqūt は、その地理辞典『Mu jam al-buldān』編纂の際、イブン・ファドラーンの『Risāla』を利用しているが、辞典の Iḥl 項目の中で、

「al-Muqtadir bi'llāh が Ibn Faḍlān をブルガールに派遣したときの話は〔人々に〕記憶され、広く世間一般に知られている。私はその数種類の写本を見た」

され、広く世間一般に知られている。私はその数種類の写本を見た」

と、また Rus 項目には、

「以上は、私が、私が Ibn Fadlān の『Risāla』から一字一句引用したものである」

と述べている。Yāqutの説明によれば、『Risāla』には数種類の版本が存在したと考えられるが、現存するマッシュハド写本とYāqutの引用文を比較・校合すると明らかに、Yāqutの引用したものは現存のマッシュハド写本と同一本であり、別版本を用いたとは考え難い。従って、両本

4. 訳註の方針

本訳は、マッシュバド写本を底本としているが、下記の校訂本および研究論文の中に見られる諸見解に基いて、写本を改めた箇所も多い。さらに、先きに述べたように出来る限り完全な原本に接近するために、他のイスラーム地理書の中に所載されている関連記事を校合して、明らかにイブン・フッドラーンに依ったと思われる引用記事を〈註〉の中で訳出した¹⁰⁾。なお、『Risala』の内容を言語、地理、部族、習慣などに分類して解説した、事項の註釈を中心とする小冊子を別に準備しているのも、本書の〈註〉は、主として訳出する際に問題となる写本の読み、解釈の相違を中心としたものとなった。次に訳註の方針について、気付いた点をいくつか述べておく。

- 1) 歌文中の小見出し(章、節)、「」,「」,「」,「」,「」は、原本に基づくものではなく、便宜上、訳者が加えたものである。とくに、[] 内の文字は達意のために訳者の考えで補った語句、() は対応語を示している。§ 1, 2, 3 …などの小見出しは、訳者が予定している註釈書に便利ように区分したものである。
- 2) 初出の地名、部族名、人名などについては、まずカナを、次に欧文転写文字を記した。なお、カナ読みについては慣用によったものもある。例えば、ボハラ(ブハラー)、ホラズム(フアーリーズム)、カリフ(ハリーフッ)など。また、アラビア語の人名、地名に付されている定冠詞 al- は、カナ読みの部分に於いては無視されたものもある。
- 3) 左欄外の数字はマッシュハド本の写本頁を示す(対照表は巻末索引参照)。
- 4) 〈註〉は、必ずしも以上の方針によるものではない。例えば、カナと欧文転写を併記せず、欧文転写のみを用いた場合も多い。

5) 引用書目略記

Abu Ḥamīd
Abu Ḥamīd al-Andalusī al-Gharnāṭī, *Tuḥfat al-alḥab*. Ed. C. E.
Dubler, Madrid, 1953. 及 ed. G. Ferrand, *Journal Asiatique*, 207
(1925).

[AR] Amīn Aḥmad al-Rāzī, Ḥaṭṭ Iqlīm (Zeki Validi Togan, Ibn Fadlān's Reisebericht 引用).

[AT] Ahmad al-Tusi, 'Ajā'ib al-makhlūqāt wa gharā'ib al-mawjūdāt (Zeki Velidi Togan, Ibn Fadlan's Reisebericht 引用).

BGA
Bibliotheca Geographorum Arabicorum. Ed. De Goeje, Leiden, 1870-
1906.

[Y] al-Biruni, al-Jamahir fi'l-jawahir. Ed. F. Krenkow, Hyderabad-Decan, 1936.
BSOAS
[C] Bulletin of the School of Oriental and African Studies, London.
M. Canard, La relation du voyage d'Ibn Faḍlān chez les Bulgares de la Volga. Annales de l'Institut des Études Orientales, XVI, Alger, 1958, pp. 41-146.
[Cz] K. Czeglédy, Zur Meschheder Handschrift von Ibn Faḍlān Reisebericht. Acta Orientalia hung., I, fasc. 2-3, Budapest, 1952, pp. 217-242.
[D] Risalat Ibn Faḍlān. Ed. S. Daḥḥan, Damas, 1959.
Dozy R. Dozy, Supplément aux dictionnaires arabes. 2 vols., Paris, 1927.
Dunlop, Khazar D.M. Dunlop, The History of the Jewish Khazars, Princeton U.P., 1954.
EI Encyclopaedia of Islam.
Frähm C.M. Frähm, Ibn-Foslan's und anderer Araber Berichte über die Russen älterer Zeit. St. Petersburg, 1823.
H-Ä Hūdud al-'alam min al-mashriq ila al-maghrib. Ed. M. Sotodeh, Tehran University Publication No. 727. Tehran, 1962.
[IF] Ibn Faḍlān, Risalat.
I. Hawqal Ibn Hawqal, Şurat al-aqd. Ed. J. H. Kramers, 2 vols., Leiden, 1938.
I. Khurdādhbeh Ibn Khurdādhbeh, al-Masalik wa'l-mamalik. BGA, VI, Ed. De Goeje, 1889.
I. Rustah Ibn Rustah, al-A'laq al-nafisat. BGA, VII, Leiden, 1892.
Iṣṭakhri al-Iṣṭakhri, Masalik al-mamalik. BGA, I, Leiden, 1870.
JA Journal Asiatique.
[K] A. Л. Ковалевский, Книга Ахмеда Ибн-Фадлана о его путешествии на Волгу в 921-922 гг. Харьков, 1956.
Kazimirski De B. Kazimirski, Dictionnaire Arabe-Français. 2 vols, Paris, 1960.
Lisān Ibn Manḡūr, Lisān al-'arab. 15 vols. Beirut, 1955-56.
Marvazi Marvazi, Sharaf al-Zamān Ṭahir Marvazi on China, the Turks and India. Ed. V. Minorsky, London, 1942.
Mas'udi, Akhbar Mas'udi, Akhbar al-zamān. Ed. Aḥmad Ḥanafī, Cairo, 1938.
Mas'udi, Muruj Mas'udi, Muruj al-dhahab. Ed. 'Abd al-Ḥamid, 4 vols. Cairo, 1958.
Mas'udi, Tadbih Mas'udi, al-Tanbih wa'l-ishraf. BGA, VIII. Leiden, 1894.
Muqaddasi Muqaddasi, Aḥṣan al-taqāsim fī ma'rifat al-aqālim. BGA, III, Leiden, 1906.
[Q] Zakariyā al-Qazwini, Aṭhar al-bilad wa-akhbar al-'ihad. Dar Ṣādir, Beyruth, 1960.
[R] H. Ritter, Zum Text von Ibn Faḍlān's Reisebericht. Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft, Bd. 96, Heft I, pp. 98-126.

6) アラビア・ペルシア語の転写法

ī	ā (部頭のハム)	ḍ	ā
ب	b	ط	u
ت	t	ظ	i
ث	th	ع	aw
ج	j	غ	ay
ح	h	ف	ly
خ	kh	ق	uw
د	d	ك	a, at
ذ	dh	ل	al
ر	r	م	p
ز	z	ن	ch
س	s	ه	g
ش	sh	و	
ص	ṣ	ي	

- 1) Risala は、〈報告〉、〈手帳〉の意であるが、正式の題名は、明らかでない。Yaqui は、その地理辞典『Mu'jam al-buldān』の中で、イブン・ファドラーンの書を Risala (I. 723, 834, II. 436, 486, 834), Qisat ibn Faḍlān (I. 113), もしくはただ Kitab (I. 112) と呼んでいる。Qazwini にも同じく、Risala (586) とある。
- 2) イスラーム地理・旅行書の中に見える Bulghar, または Bulkar はヴォルガ・ブルガルに比定される。ところが、イブン・ファドラーンの書にはヴォルガ・ブルガルはサカーリブ Šaqaliba とある。サカーリブとブルガルの両名称には、厳密な区別はなかったと思われる。一般に、サカーリブは 9~10 世紀頃、東欧地域に住んでいたフィン、ブルガル、ブルタース Burts, ルース、あるいはトルコ系諸部族の総称として漠然と用いられた。例えば、Ibn Khurdādhbih と Ibn al-Faḍlān による 2 つの地理書の中に見られる「ルース商人 tuḡār al-Rūs の記載」を比較すると、前者の記す ルース商人 tuḡār al-Rūs の箇所は、後者では、サカーリブ商人 tuḡār al-Šaqaliba と改められている (Ibn Khurdādhbih と Ibn al-Faḍlān とは明らかに同一系統に属する地理学者である)。従って、〈サカーリブ〉を一概に〈スラブ〉と訳すのは適当でない。たとえば、アラビア語のサカーリブ、もしくはシクラーブ Šiqlab なる名称が、ビザンチンの諸文献に散見する Sklave, Sklavene より転写であることが正誤を得た説としても、I. Hrbek, BULGHAR (E.I. New ed., Vol. I) 参照。
- 3) バグダード・カリフ側がブルガール王の申出を受諾した理由について、Z.V. Togan は、サーマン朝を中心とする地方政権、トルコ系諸部族の抬頭、カルマト派の叛乱、タバリスターンにおけるアリ一派の陰謀などによって、後退期をむかえた当時のカリフ政権は、東北の情勢に大きな関心をよせていたこと、またカスビ海北岸の大勢力ハザル国を仰るためにも、北方の新勢力ブルガールの成長をむしろ歓迎したため、と特に政治的側面から、一方、ソヴィエトの学者 A. П. Конраевский は、その宗教的な面から解釈した。しかし、時のカリフがこの使節の派遣と両学者が説明しているような重大な関心をもって実行したかは甚だ疑問である。私は、ブルガール書簡の上巻者 Nadhir al-Harāmī とブルガール王との間の個人的な利害関係によって、この使節派遣が計画・実行されたのではないかと考えている。ブルガール書簡の到着以前から、Nadhir とブルガール王との間には密接な交流があったことは、『Risala』の記事から明らかであり、使節の代表者にも Nadhir のマウラーの一人 Susan が選ばれている。このように使節派遣の準備はすべて Nadhir を中心として積極的に進められたことは明らかである。さらに、当時、北方貿易に非常に強い関心をもっていたバグダード商人達と Nadhir との結びつき——この関係を示す具体的史料は見出せないが——にも注目すべきであろう。10世紀初頭以来、バグダード、ダマスカス、クーファ在住のイスラーム商人達は、北方産物である毛皮類 (貂、キツネ皮)、海獣の骨、蜂蜜、奴隸などを求めて、カスビ海北岸、とくに北方貿易の一大マーケットとして発展しつつあったブルガール方面に積極的に進出した。しかし、ヴォルガ河口近くに勢力をふるハザル国、東にはサーマン朝やホラズム国の存在によって、彼らは北方に通じる自由な貿易ルートを開発することが出来なかった。従って、仲介貿易によらずに北方と

の直接貿易を望んでいたバグダード商人達とハザルから独立するためにバグダード・カリフの政治・経済的援助を求めたブルガール国とは、完全に利害を一にしていたと言える。以上の諸点から考えて、ブルガール使節派遣の必要性をカリフに建言し、実行させた大きな力は、カリフの周辺にバグダード商人達であったのではないだろうか。

- 4) イブン・ファドラーンの生死、詳しい事蹟、また使節団での本来の役割は明らかでない。『Risala』の中では、彼は使節の代表者スーサンと対立する感情を持っていたと思われる。スーサンを代表者と認めながらも、その実際の役割を否定する態度が箇所に見られる。なお、イブン・ファドラーンの旅行記の概略は拙稿『Ibn Faḍlān のヴォルガ・ブルガール旅行記について』(史学 40, 2-3 号, 1967) を参照されたい。
- 5) この点については、別に論考を用意している。ここではその結論だけを掲げた。Iṣṭakhri (Ibn Hawqal) に拠る北方知識の中には、Ibn Rustah と Ibn Faḍlān の影響が感じられるので、独立の知識系統とみなすことには多少の問題がある。しかし、『Hudūd al-'ālam』や Marvazi の書『Tabā'i al-bayāwān』に見る〈ブルガール〉記事は、明らかに Iṣṭakhri に拠ったものと考えられる。ここで〈イスラーム初期〉とは 10 世紀中頃までを言う。
- 6) V. Minorsky, The Khazars and the Turks in the Ākam al-Marjān, BSOAS IX (1937), p. 141 参照。
- 7) これには 3 種類の地理書—1) Ibn al-Faḍlān, Kitāb al-buldān の断片, 2) Abū Dulaf Miṣr b. al-Muhalhil, al-Risala al-ukhla, 3) Ibn Faḍlān, Risala—が 1 本に合綴されている。Z.V. Togan, Ibn al-Faḍlān-Handschrift, JA, t. 204 (1924); P. Kahle, Zum Mashhad Handschrift, ZDMG, 88 (1934); V. Minorsky, Tamim ibn-Bahr's journey to the Uyghurs, BSOAS, XII/2 (1948) pp. 275-305; V. Minorsky, Abū-Dulaf Miṣr ibn Muhalhil's travel in Iran, Cairo U.P. 1955 参照。
- 8) A. П. Конраевский, 46.
- 9) これら諸本間の細かい字句の異同は、当該箇所付した〈註〉を参照。なお、ここでは結論のみを掲げたが、稿を改めて詳しく論じる予定である。
- 10) Abū Ḥamid al-Andalusī の書『Tuhfat al-alḥab』の中に収められている東欧に関する記事は『Risala』の内容と著しく類似する。この事実を、Abū Ḥamid が東欧旅行の際、Ibn Faḍlān の『Risala』を参考にしたことを示していると考えられる。Abū Ḥamid の東欧旅行に関する断文は別に発表する予定であるので、本稿の〈註〉では、とくに必要と認められる箇所を除いて、Abū Ḥamid を引用しなかった。

I 序 言

fol. 196b § 1. これは、[カリフ]ムクタディル al-Muqtadir の使者として、サカーリバ al-Shaqilba 人の王のもとに使用したムハンマド・ブン・スライマーン Muhammad b. Sulaymān のマウラー、アフマド・ブン・フッドラーンブン・アル・アッパース・ブン・ラーシド・ブン・ハンマード Ahmad b. Faḍlān b. al-ʿAbbās b. Rashid b. Hammād の書である。

彼は、この書の中で、トルコ国 Balad al-Turk, ハザル al-Khazar, ルース al-Rus, サカーリバ, パーシユギルド al-Bashghird など実際に見聞した彼らの信仰の相違、王侯達のことや生活の諸々の形態について言及している。

§ 2. アフマド・ブン・フッドラーンは語った。

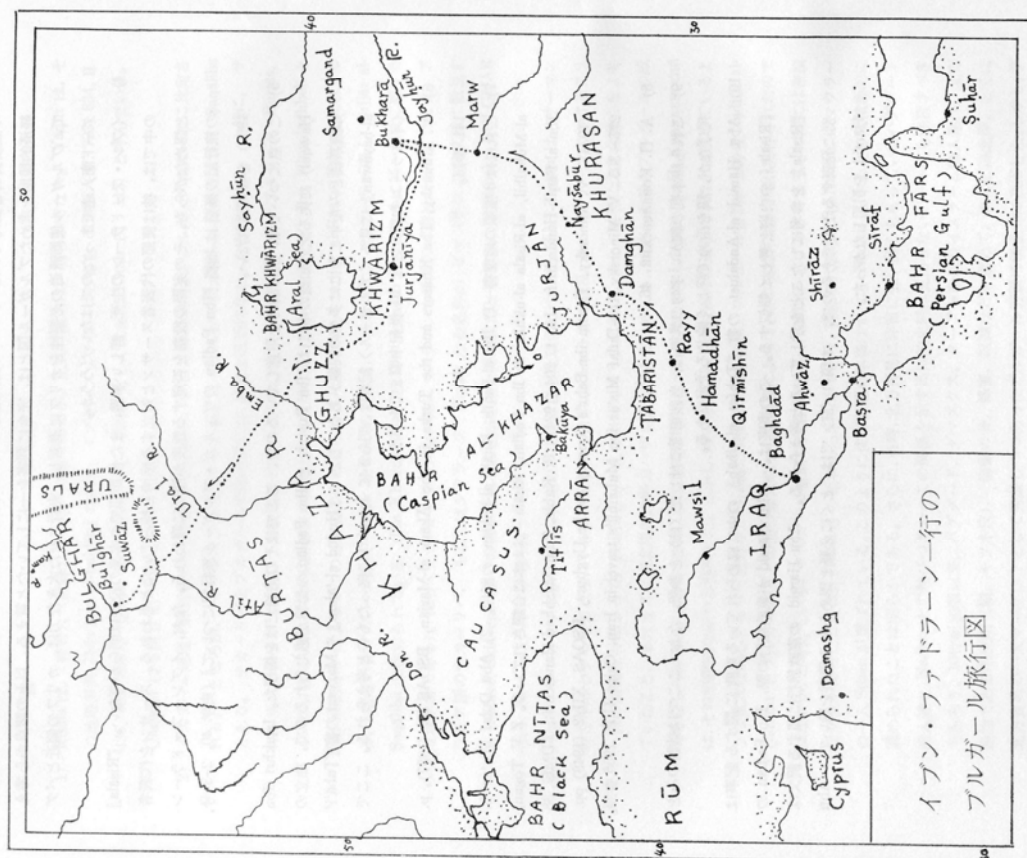
敬虔信徒の長⁹⁾、ムクタディルのもとにサカーリバ人の王、ヤルトッワールの子アルミシユ Almish b. Yalīwar⁹⁾ の次の様な書簡がとどけられると、早速、その諸願は受理されることになった。つまり、それにはサカーリバの王に誰か[イスラーム教の]僧侶について説き、イスラーム法を解説し¹⁰⁾、王のためにマスジドを建て、王の国とその金庫¹¹⁾において彼(カリフ)のためのフトッパが行なわれるために¹²⁾ [必要な]説教壇を設けてくれる人を派遣してくれるように、加えては王と敵対する諸王¹³⁾ から自らを防御する要塞を構築してくれるように、とあった。

そしてサカーリバの王のために [その件をカリフに] 上奏した者は¹⁴⁾、ナジール・アル・ハラミー Nadhir al-Harami¹⁵⁾ であった。

なお、彼(サカーリバの王)に [カリフの] 書簡¹⁶⁾ を読み、[予定した] 下賜の品を進呈したり、[同伴の] ファキーフやムアッリム達の身柄を保護したりする任務が、この私(イブン・フッドラーン)に委託された¹⁷⁾。

彼(カリフ)はサカーリバの王のために、前述した建物を建て、ファキーフやムアッリム達に支払う給料分として持参していく [のに必要な] 資金を、イブン・アル・フラート Ibn al-Furat の一所領、ホラズム al-Khwarizm 地方のアルサフシ ヌミシーン Arthakhushumishin とする領地 [の売却代金] から調達された¹⁸⁾。

サカーリバの王から [カリフ] ムクタディルに使わされた使者は、ハザルびと、アブド・アッラーフ・ブン・パーシュトゥー Abd Allah b. Bashm という男で



イブン・ファドラーン一行の
ブルガル旅行図

あった¹³⁾。一方、スルタン側¹⁴⁾からの使者はナジール・アル・ハラミーのマウラ
ー、スーサン・アル・ラッシー Susan al-Rassi であって、それにトルコ人のテギ
ーン Takīm, サカーリバ人のバリス Balis を随伴した。また前述のように私
も彼らと同行することになった。

なお、私には、彼(サカーリバの王)とその妻子、兄弟および重臣達への贈物とナ
ジール宛ての手紙で依頼のあった薬物類を手渡すように、と言付かった¹⁵⁾。

- 1) 写本の本文の冒頭箇所は, [Y], I 112 (Iul); 468 (Bashghird); 723 (Bulghar); II 436 (Khazar); 484 (Khwarizm); 834 (Rus) に見える。[Y] は「私は, al-Muqtadir bi'llah の使者としてサカーリバ人の王のもとに使用した Muhammad b. Sulayman のマウラ — Ahmad b. Faqlan b. al-'Abbas b. Rashid b. Hamad が作成した 報告書 (Risala) を読んだ。彼は, その書の中でバグダードを出發してから帰国するまでの間に聞いたことを記している」([Y], I 723)。しかし [Y] の説明通り, [IF] がその報告書の中で, 使節一行の帰途, すなわちブルガールの地を出てからバグダードに帰るまでの経緯を記したかは疑問である。なぜならば [Y], [Q], [AR], [AT], および現存するマシハド写本の本文からは, 使節の役職に係る直接的な記事を見出すことはできない。[註] 138, 221 を看よ。
- 2) amir al-mu'minin. カリフ al-Muqtadir bi'llah を指す。本訳では, これをすべて〈敬虔僧徒の長〉と訳した。
- 3) 本文は al-Hasan b. Balwar と読める。一方, fol. 202 b には Almis b. Shilki とある ([註] 143)。同箇所は [Y], I 723 には Almis b. Shilki Balwar とある。I. Rustah, 141: Almis; H-'X, 194: Mas (?); Marvazi, 23: Btlu.
- 4) 此処は [Y], I 468 (Bashghird) には, li-yufida 'alay-him al-khila'a wa yu'allim-hum al-shara'i'a 'l-islamiya (彼らに贈物を下賜し, イスラーム法を説くために), とある。
- 5) fi baladi-hi wa jami'i mamlakati-hi. [Y], I 723 は, これを fi jami'i baladi-hi wa aqlari mamlakati-hi と改めている。
- 6) li-yuqrna 'alay-hi al-da'wata la-hu. la-hu の hu は 〈カリフ〉を指す。da'wat は iqamat al-da'wat の意。Dozy, I 445 及び BGA, IV (Addenda) 236 参照。この箇所を字義通りに訳すならば, 「カリフのためのフトバが行なわれるよう説教壇がサカーリバの王に設けられるために……」となる。
- 7) すなわち 〈ハザル国〉を指す。
- 8) wa kana 'l-safra fi-hi. hu は 〈サカーリバの王〉のこと。safir には 〈仲介者〉, 〈使者〉の義があるが, ここでは 〈上奏者〉と訳す。[ZV], 2 は Vermittler の意とした。[Ca], 335 参照。[Y], I 723 には wa kana 'l-safra la-hu とある。
- 9) [Y], I 723 には Nadhir al-Hazmi とある。[ZV], 2 はこれを Nadhir al-Hurami, Berthold は Nudhayr と読んだ (El, I, BULGHAR)。
- 10) al-kitab. 〈コーラン〉の意ではなく, ここでは 〈カリフ書簡〉を言う。[IF] は al-kitab を屢々 〈カリフ書簡〉の意に用いている。[註] 25 参照。
- 11) 此処は, 判読が難しい。[Y] (I 723) は, この部分を彼の地理辞典の (Bulghar) 項目に合致するように甚しく改竄したため, [IF] の文意を正確に伝えていない。すなわち,

II バグダード～ジュルジャーニーヤ

§ 1. かくして、われわれ「一行」は、[ヒジュラ暦] 309 年のサファル月 11 夜、木曜日¹²⁾に平安の都(バグダード)を旅立った。ナフラワーン al-Nahrawān に 1 泊だけして再び出て、ダスカラ al-Daskara に着くと、そこに 3 日間滞在した。

その後、ただひたすら旅を続けて¹³⁾、フルワーン Hulwan に到着してから 2 日の間留った。そこからキルミーン Qirmisīm に向い、キルミーンには 2 日居た。そこを出るとハマザーン Hamadhān を目指して進み、ハマザーンに着くと 3 日間滞在した。なおも旅を続けて、サーワ Sawat に着くと、2 日の間滞在した。そこからレイ al-Rayy に行き、レイではスッルーク Ṣūlūk の兄、アフマド・ブン・アリー Ahmad b. 'Alī「の来訪」を待って 11 日間滞在した。彼は、フルール・アル・レイ Khwār al-Rayy に居たためである。その後、フワール・アル・レイに向け出発し、そこに 3 日間滞在した。さらにシムナーン Simnān へ、またダームガン al-Damghān へと進んで行ったが、ダームガンでは不意にダーイー al-Da'i に所属するイブン・カーリン Ibn Qarīm¹⁴⁾に出会ってしまった。そこで、キャラバン隊の中に身を隠しながら、なおも旅をつづけ、やっとの思いでニシャープール Naysabur まで進んだ。

ときすでにライラー・ブン・ヌッマーン Laylā b. Nu'mān は殺害されていた。ニシャープールでは、ホラーサーンの軍団長、ハンマワイフ・クサー Hamawayh fol. 197b Kusa と会見した。その後、サラフス Sarakhs、メルブ Marw、そしてアームル Āmul 砂漠の境にあるクシュママーハーン Qushmāhān へと旅をつづけていった。クシュママーハーンでは 3 日間とどまり、砂漠に踏入るに先きだって、ラクダを休息させた。

アームルまでの砂漠を横断して、ジャイフーン Jayhūn「河」を渡り、ターヒル・ブン・アリー Tahir b. 'Alī のリバート、アフフリール Āfīr¹⁵⁾に着いた。次いでバイカンド Baykand に向った。

§ 2. ボハラ Bukhara に到着すると、ホラーサーン・アミールの秘書ジャイハニー al-Jayhānī——一般にホラーサーンでは、彼のことを アル・シャイフ・アル・アミード al-Shaykh al-'Amd と呼んでいる——のところにいった。

fa-bada' tu ana bi-qira'ati 'l-kitaibi 'alay-hi wa tashimī mā uhdīyā ilay-hi wa 'l-ashrafi min al-fuqahā'i wa 'l-mu'allimīna (さて、私は彼「ブルガール王」に書籍を明読し、また王と高官達、つまりファキーフやムアッリム達に贈物を手渡しばじめた)とある。[D], 68 の推定したように、fa-nudhibu とすべきであろう。併せて [ZV], 2 n. 5 参照。

12) 此処は、写本の本文が難解である。wa-subhāba la-hu bi'l-mālī 'l-maḥmūlī ilay-hi li-bina'i mā dhakarnā-hu wa lī't-jirayuti 'ala' l-fuqahā'i wa 'l-mu'allimīna 'ala' 'l-qai'ati 'l-ma'rufati bi-Arthakushimīthīn min ardī Khwarizm min qiyā'i Ibn al-Furāt と読む。subhāba の主語は、〈カリフ〉である。subhāba は、〈制当てる〉、〈支配する〉の意であろう。例えば Dozy, I 622 は、subhāba lla 'l-madrasati 'l-fawa'idā nār なる文章を il assigna des revenus au collège の意と訳している。la-hu と ilay-hi の hu は、いづれも〈サカーリバの王〉を指す。[K], 162 n. 25; [Cz], 235 参照。

13) ハザル国に関する情報は、Ibn Bashū から得たものであり、[IF] 自身は、ハザル国へは訪れていないと思われる。[註] 401 を看よ。

14) min jilati 'l-sulṭān. 写本の文中では、バグダード・カリフ Muqtadir bi'llah は、amr al-mu'minin, sultān, khalīfa, ustādīh などの各様の称号で見える。

15) adwīya. 後出の説明によると、サカーリバの王と会見した時、[IF] は、この他に香料、衣類、真珠などを贈っている。本文 25 頁を看よ。なお、この文によって、ブルガール王は使節派遣以前から Nadhir と交流があったことが知られる。

ジャイハニーは、われわれのために宿舎を提供し²⁰、その上、必要とあれば万事あれこれ世話をしてくれる者を一人つけてくれた²¹。

さて、数日間滞在すると、ジャイハニーは、われわれが「ホラーサーンのアミール」ナスル・ブン・アフマド Nasr b. Ahmad と謁見出来るように取計ってくれた。そこで、われわれはナスル・ブン・アフマドのもとに通された。当時、彼は「未だ」髯もない青年であった。われわれは、彼をアミールの称号で敬呼すると²²、彼はわれわれに座るよう命じた。

まず以下のことで彼との会話がはじめられた。彼は、

「汝らの「バグダード」出発の際、わが主君、敬虔信徒の長は如何あそばされたか。アッラーフよ！ 彼にこの世でのより永き御存命と御安寧をお与えください。彼ご自身は勿論のこと、彼の侍従²³、並びに諸臣²⁴についても同様に」と言った。そこで、われわれは、

「御壮健であられます」

と答えると、さらに彼は、

「なお一層お仕合せに」

と言った。

つづいて「次の様な内容のカリフの」書簡²⁵が彼に向って朗読された。つまり、イブン・アル・フラートの代理官、キリスト教徒のアル・ファドル・ブン・ムーサー al-Faql b. Musa からアルサフシェ・ミシェン [の土地売却代金] を受取って²⁶、それをホラズムの人、アフマド・ブン・ムーサー Ahmad b. Musa に手渡すことと、われわれ（イブン・ファドラーンの使節一行）の出發のときには、ホラズム在駐の地方長官²⁷宛てに、今後、われわれに支障なきよう取計う手紙とバープ・アル・チュルク Bab al-Turk までわれわれを護衛し²⁸、不時の災難をとりのぞくこと「を要請する所」の手紙を用意するように、とあった。

「ときに、アフマド・ブン・ムーサーはどこにいるのか」

と彼は、たづねた。われわれが、

「私達の5日後に出發するようにと平安の都に残してきました」

と返答すると、彼は次の様に言った。

「わが主君、敬虔信徒の長が御命じになられたこととあれば、問題がないのだ。アッラーフよ！ 彼の御存命を永からしめたまえ」

§ 3. 彼（イブン・ファドラーン）は語った。

さて、その報告がイブン・アル・フラートの代理官、キリスト教徒のアル・ファドル・ブン・ムーサーのところに達すると、彼（アル・ファドル）は、アフマド・ブン・ムーサーの件で陰謀を企て、サラフスの駐屯地からバイカンドに到るホラーサーン道「を警備する所」の警備警察長²⁹らに宛てて、

「キャラバン宿や監視所³⁰では、これこれの時徴挙示のあるホラズムびと、アフマド・ブン・ムーサーなる男を密偵すべし。とにかく、もしその男を見かけ

た者は、われわれの手配書が到着するまでの間、拘留しておく³¹」
という通達を出した。

かくして彼（アフマド・ブン・ムーサー）は、メルブで逮捕・監禁された。そこでわれわれの方も、ボハラに28日間滞在することになってしまった。

嘗て、アル・ファドル・ブン・ムーサーはアブド・アッラーフ・ブン・パーシェ・トゥーやその他のわれわれの同行者達と同調して、

「もし私達が「これ以上」留っていれば、やがて急に冬が来て、前進することが困難になるでしょう。アフマド・ブン・ムーサーは、ちゃんと私達の望み通りのことを行い³²、やがては追付いて来るでしょう」
と語っていた。

§ 4. 彼（イブン・ファドラーン）は語った。

私は、ボハラで各種のディルハム貨幣を見た。その一つは、アル・ギトリーフ・イーヤ al-Ghitrifiya と書いて青銅³³、赤銅³⁴や黄銅でつくられており、これらの貨幣は重量ではなく、貨幣の枚数によって「その価値を」決めるのである。つまり、それ100箇が銀貨1ディルハムに相当する。

さて、彼ら（ボハラの人々）は、女の結婚金の契約条件を以下のようにして決める。

「つまり」どここの息子の娘をギトリーフ・イーヤ何千ディルハムで買った、と。また、彼らの不動産や奴隸の売買のときも同じく「ギトリーフ・イーヤ貨幣を用いるのである」それ以外のディルハム貨幣は使用しない。なお、黄銅だけで鋳造した別種のディルハム貨幣——それ40箇で1ダーニク (dāniq) に相当——やアル・サマルカンド・イーヤ al-Samarqandiya と呼ばれる同じく黄銅製のディルハム貨幣——それ6箇で1ダーニク——がある。

§ 5. 冬が襲ってきたと警告するアブド・アッラーフ・ブン・パーシュ・トゥーヤその他の者達の言葉を聞いて、急速、[ジャイフーン]河まで引返すべくボハラを出発し、ホラズムまで行く船を一隻備った。船を借りた地点からそこ(ホラズム)までの距離は 200 フェルサフ以上もあった。

ホラズム[の町]に到着するまでの間、あまりに過酷な寒さのため、昼間の僅かの時間しか進むことが出来ず、とても終日旅を続けることは不可能であった。

かくして、われわれはホラズムのアミール、ムハンマド・ブン・イラク・ホラズムシャー Muhammad b. 'Iraq Khwarizm-shah のところに行った。彼は、われわれに敬意を表して、そば近くに迎えた上、宿舎を提供してくれた。

3日すぎで、彼はわれわれを招き、トルコ入国の件について話合った。彼は、

「私は、このことを汝らに許すわけにはいかない。私としてもみすみす危険だとわかっていておけるわけだ。ところで、私が察知したところでは、この件は例の従僕、つまりテギーンが仕組んだ謀である。なぜならば、嘗て、その男はわれわれのところで鎧治屋をしていたし、またあの異教徒の国⁴⁰で鉄の売買をしていたことがあるからだ。従って、ナジールを騙して、敬虔信徒の長に連言して、サカーリバの王の手紙を贗らしめた⁴¹のも彼(テギーン)に外ならないのだ。偉大なアミール、つまりホラーサーンのアミールこそ、もし彼が[人民のための]契りどころとして認められているのであれば、敬虔信徒の長のために、この国においてフトッパを行うのに最もふさわしいお方なのである⁴²。その上、汝らと汝らも承知のあの(サカーリバ)国との間には、1,000もの異教徒の民⁴³が住んでいる。よって、以上のことはスルタンを欺かんとするものである。私は汝らにこう忠告する。ひとまず偉大な[ホラーサーンの]アミールに書状を送る必要がある。そうすれば、彼がスルタン——アッラーフよ！彼に御力添え下さい——に文面で御伺いだすことになるだろうから。よって、汝らとしては、その返事がくるまで、このまま留まっているがよい」

と云った。そこで、その日は、ひとまず彼のもとを離れたが、[再び]彼のところに戻って、ひたすら彼の厚情を損わないようにお世辞を言いがら、

「このことは、敬虔信徒の長のご命令であり、彼の書状[によるもの]なのであります。それなのに、どうして再度[カリフに]文面でお伺い立てする必要がありますでしょうか」

と言った。結局、彼はわれわれ[の通過]を許可した⁴⁴。そこで、われわれはホラズムからジュルジャーニーヤ al-Jurjaniya——両地の間は水行 50 フェルサフある——まで河を下った。

§ 6. さて、ホラズムのディルハム貨幣には、偽造貨⁴⁵、鉛貨⁴⁶、粗悪貨⁴⁷、黄銅貨があることを私は知った。彼ら(ホラズムの人々)は、ディルハム貨幣をタージヤ tazija と呼び、その価値は 4.5 ダーニクに等しい。彼らの両替商⁴⁸では、キアーブ ki'ab⁴⁹、独裁⁵⁰やディルハム貨幣を造っていた。

彼らは、話ぶり、性格ともに最も粗暴な人々である。彼らの会話は、どこかムクドリ⁵¹の鳴きごえに似たところがある。

またホラズムには、[町から]1日行程のところにアルダクアー Ardaku という村があって、その住民は自らをアル・カルダリーヤ al-Kardaliya と称しているが、彼らの語言業は蛙の鳴きごえに大変よく似ている。彼らは、つねに礼拝の最後に唱える《敬虔信徒の長、アリー・ブン・アブー・ターリブ 'Ali b. Abu Talib, アッラーフよ！彼に安事を下さらんことを》[なる箇所]を省く⁵²。

§ 7. われわれは数日間、ジュルジャーニーヤに滞在した。

ジャイフーン河は全面凍結し、その氷の厚さは、17 シブル⁵³に達していた。その氷上をまるで道路の上を通ると同じように、馬、ラバ、ラクダや荷車が通っていた。しかもその氷は全く動かずに定着し、3カ月間、そうしたままの状態になっているのである⁵⁴。

まさしく敬虔の扉⁵⁵がわれわれに向かって開かれていたのではないかと思われる地方を訪れた。その地方では雪が降るときには必ず非常に激しい風をともなう⁵⁶。

さて、その住民が仲間の一人に「何か親切を尽して」、相手の気持を得たいと望んだときには、

「さあ、私のところに来一緒に話をしようではありませんか⁵⁷。丁度、私のところには恰好の火がありますよ」

と言う。つまり、このようにすることが相手を敬い、より親密な関係をつくることになるのである。

またことに、いと高きアッラーフは、薪木について、彼らに御寛大であられ、それを薪でお与えになられた。つまり荷車一杯分のターグ al-tagh 薪は⁵⁸、彼らの[使っている]ディルハム貨幣で2ディルハム——およそ 3,000 ラトル (ratl)

【の重量】に相当する——である。

彼らの食糧達の慣例として以下のことがある。乞食は、家の戸口に立つのではなく、家の一室まで入りこんできて、しばらくの間、^{44a} 炉辺に座り、温まると、「バクンド！」——つまり、[ホラズム語で] パンの意——と言う^{44b}。

§ 8. ジェルジャーニーヤでの滞在が長引いてしまった。

結局^{44c}、われわれはラジャブ、シェパーン、ラマザン月、シャウワールの月日をそこで過ごしたことになる^{44d}。

潜在が長くなったのは、[ひとえに] 厳しい寒さのためであった。

さて、[ジェルジャーニーヤに滞在しているとき] 次の様なことを耳にした。つまり、ある2人の男^{44e}が藪から薪木を積出そうとして、12頭のラクダをつれて出発した。ところが2人とも、火打ち道具もつけ座^{44f}も携帯していくのを忘れてしまい、已む無く全く火気なしで一夜を過ごした。よく朝になってみると、厳しい寒さのためにラクダは[すべて] 死んでいた、と。

私は、ジェルジャーニーヤの寒冷現象^{44g}に原因する以下のような事柄を知った。その町の市場や路地は、実に閑散としており、多くの市場や道路を歩いてみて、人影を見かけたり、況してや人とすれ違うこともない程である。

また、私が浴場を出て家に戻って靴を見たところ、すでに靴は氷のかたまりと化しており、火に近づけて溶かさねばならぬになっていた^{44h}。

私は二重の家の中に⁴⁴ⁱ、さらにトルコ製のフェルトでつくったテント^{44j}を張った中で寝泊りした^{44k}。その上、外套と長袖服^{44l}にくるまるまっていたが、それでもなお私の頬は枕に凍りつくことがあった。

fol. 199 a 裂けたり、破れたりしないように羊皮でつくった裏毛つき皮革^{44m}で覆いし貯水槽⁴⁴ⁿをその国で見かけたが、それとても何ら効果がないのである。

また、厳しい寒さのために地面に亀裂を生じて、大きなワジ(かれ谷)になったり、巨大な老木が寒さによって真っ二つに切裂けているのを私は目撃した。

§ 9. 309年、シャウワール月^{44o}も半ばを過ぎると、季節は移り、シャイフーン河の水は融けはじめた。そこで、われわれとしても旅行必需品を調達し、トルコ産のラクダを買入れ、トルコ国においてはきつと必要となる渡河^{44p}用のラクダ皮[の折畳み] 舟^{44q}を造らせたりした。その上、3カ月のパン、粟と乾燥の塩づけ肉^{44r}を用意した。

その[ジェルジャーニーヤ] 国の住民の中で、われわれと顔見知りになった者は、衣服には細心の注意を払い、十二分に用意^{44s}していくようにとわれわれに忠告してくれた。しかし[その言葉を聞いたとき、われわれは] そんな風に事柄を大袈裟に言って、われわれを尻込みさせるつもりなのだ[と] 思っていた^{44t}が、後で実際にそのことを経験してみると、事実は言われたことに数倍[も増して] 厳しいものであった。

われわれ各自は、上着を着、その上にハフターン khafim を、さらにその上に裏毛つきの羊製コート、その上にフェルトの外套、2つの目だけが見える帽子^{44u}、股^{44v}、それも一枚は裏毛つきのもの^{44w}、布靴^{44x}、羊製の縫起草の長靴^{44y}、さらにその靴の上にもう一足の靴をはいた。したがって、われわれ各自がラクダに乗りうとしたとき、着ている衣服の為に身動きさえ出来ない程であった^{44z}。

§ 10. 今までわれわれと一緒に 平安の都 から同行してきたファキーフ、ムアッリム、そして従士達は、この[トルコ] 国に入っていくのが恐ろしくなったためか、われわれ[一行] から離れた^{44aa}。したがって、私、使者(スーサン) とその義弟^{44ab}、それに2人の従士、つまりデギーンとバーリス^{44ac} とで[以後の] 旅をつづけた。

さて、旅の出発予定日になったとき、私は彼らに、

「やあ、皆の者よ！ すでに汝らのことなら何んでも知っている[サカーリバの] 王の従士[バーリス] が一緒に、ムサイビーヤ貨幣4,000ディナールを送りとどける旨記されているに相違ないスルタンの書簡を携えている。したがって、異教の王^{44ad}のところに着けば、きっとその王はその金を要求することであらう」

と言った。すると彼らは、

「そんなことでよくよくなされるな。決して彼(サカーリバの王)はわれわれに要求することはありませぬから」

と言った。なおも私は、

「きっと王は汝らに要求する、と私は思う」

と言って警告したのであるが、彼らは聞き入れなかった。

キャバラン隊の装備は万事完了し、最後にジェルジャーニーヤ人のファルス Falus^{44ae} という男をガイドとして雇った。

もはや、いと高き・偉大なるアッラーフに信頼し、あとのことはすべてお任せし

あつた。

§ 11. [ヒジュラ暦] 309年、ズル・カッダ月の第2夜、月曜日にジュジャーニーヤを出発して⁸⁰、バープ・アル・チュルクにあるザムジャン *Zamjan* というリバートに「一時」留まり、翌朝には出発して、ジート *Jit*⁸⁰ と呼ばれる場所へ泊った。しかしラクダの膝に達する程の「大」雪に見舞われたので、その宿営地に2日間とどまった。そのあとは、もはや何があろうとただひたすら⁸⁰ 人っ子一人通らない、山なき荒野の中をトルコ国奥深く進んで行った。こうして、われわれは10日の間、旅を続けたのであるが、[その間というものの]惨憺、疲勞、過酷なまでの寒さ、途絶えることのない[吹]雪に遭遇した。[それにくらべれば、]あのホラズムでの寒さなどは、まるで夏の日のように思われた。しかも、われわれの身にふりかかった「危険な」事柄をいっいち記憶していないが、あやうく生命をおとすような危険な目にも会った。

数日のあいだ、激しい寒さがわれわれを襲ったことがあった。そのとき、デギーンと私とは肩を並べて歩き、彼のかたわらには一人のトルコ人がいた。そのトルコ人はデギーンにトルコ語で何か話かけた。するとデギーンは笑いながら「私に、」
「さてさて、このトルコ人は、あなたにこんなことを申し上げております。“一体全体、おれ達の神は⁸⁷、おれ達に何をお望みなのだろうか。神はおれ達を救さず、殺そうとも思っているのか。もしお望みのものが何であるかがわかれば、それをお持ちするのだが”と⁸⁸」

と言った。そこで私はデギーンに、

「彼にこう言ってやれ。“神は、ただ《ラッラーフの他に神なし》とおまえ達が叫ぶことをお望みになされているのだ”とな」

と言った。するとそのトルコ人は、笑いながら、

「わかっていれば、そうしたんだがね」

と言った。

その後、巨大なターグの木がある場所につき、そこで休息をとった。キャラバン隊の者達は、火を焚いて暖をとり、衣服を脱いで火にあぶった後、[再び]出発した。毎夜、真夜中から「あくる日の」正午か午後に至るまで出来る限り速く、且つ出来る限り多く進もうとして、ただひたすら旅をつづけ、その果に野営した。かくして15夜の間進んだとき、岩石の多い、とある大山のもとに着した。そこには水のあふれ出ている泉があり、窪地には水がたまっていた⁸⁹。

注

- 16) 西暦 921 年 6 月 21 日。
17) 写本には, la yukunu 'ala shay'in とあるが, la alwī 'ala shay'in と改めるべきであろう。[IF] は, これと同じ表現を随處で用いており, 後の特長的な表現法の一つと言える。併せて [註] 86, 120, 304 を看よ。
18) 写本の Ibn Qāriq は, Ibn Qārin と改める。
19) 写本の Āfrin (?) は Āfir とする。一般には, Farbir, Afrihar, Parib と呼ばれた。H-A, 117; Išākhri, 298-9, 334-5 参照。
20) fa-taqaddama bi-akhdhi dārin la-nā.
21) wa-saqama la-nā rajulan [an] yuqdi hawā'ija-nā wa yuzūhu 'ilala-nā fī kulli mā nuridu と判読した。[ZV] は, yuzūhu 'ilala-nā としたが, azāha 'illa には, 次に一例を挙げるように慣用的用法がある。azāha 'ilala-hu (彼の口実を取り去った→何か障害・欠点があるために起った躊躇いの気持ちを彼から取除く→彼が満足のゆくようにする)。この用法については, Liston, II 470 と Dozy, II 158 を看よ。従って, yuqdi hawā'ija-nā と yuzūhu 'ilala-nā とはほぼ同義となるので, 訳文では「必要とあれば万事あれこれと世話をする」と訳した。
22) fa-sallamna 'alay-hi bi'l-imrati.
23) fiyan (fatan). Dozy, II 241 に依れば, fatan は, serviteur novice, eunuque の意。ここでは, ghulam (ghilman) と同意と思われる。
24) awliya' (wali). Dozy, II 843 参照。
25) al-kiah. <カリフ書簡> のこと。[註] 10 を看よ。
26) 写本には bi-tashm とあるが, [D] 77 の修正 bi-tasallum に依って訳した。
27) ilya shābi-bi-bi-Khuwārim. hu は, <ホラサーン・アミールの長官のもとに>の意とされる。従って, 此処は「ホラズムに居るホラサーン・アミールの長官のもとに」の意となる。なお, [ZV], 7 n. 4 参照。
28) bi-badhrat. Dozy, I 60 には badhraqa は prendre un guide, une escorte とある。[ZV] 109-110 は, この語源をトルコ語の bayraq (軍隊の小旗) と推している。
29) 'ummal al-mu'awin. Dozy, II 192 は shābi al-na'una を préfet de police の意に, Margalouth は I. Miskawayh, I 59 の ashab al-atraf wa 'ummal al-mu'awin なる箇所を 'ummal al-mu'awin を public security (IV 37), minister of public security (64, 453), chief of the garrison (57) と訳した。[ZV], 8 n. 2, BGA, IV 307 参照。
30) al-marā'id (marsad). Dozy, I 533, Kaziminski, I 869 参照。
31) 写本の ya'taliq-hu は ya'ta'liq-hu と改める。
32) 此処の写本は, wafāna とあって, 解釈し難い。此処は後出の文 ([註] 186) と対応するものであるから, idha wafā-na labīqa bi-na とすべきであろう。wafāna を「彼

(Ahmad b. Musa) が私達の強み通りに事を行なう』つまり「彼が私達に 4,000 デイナールを無事持って来る」の意に解す。[註] 186 を参照。[C] 57 は、この部分を Ahmad b. Musa, quand il sera arrivé ici, nous rejoindra と訳す。[ZV] 110-111; [K], 170 n. 83 b 参照。

33) nuḥās.

34) shabāh.

35) la yuballu ilay-ya tarku-kum tugharrirna bi-dimā'i-kum.

36) balad al-kuffār. 具体的にどここの国を指したかは明らかでないが、暗に「サカーリバ国」のことを言ったのであろう。[ZV], 11 n. 1 参照。

37) wa-buwa alladhi ghazza Nadhran wa-ḥamala-hu 'ala kalami amiri 'l-mu'minina wa iṣṣali kitābi maliki 'l-ṣūqilabati ilay-hi.

38) kāna abaqqa bi-iḡāmāti 'l-da'wāt li-amiri 'l-mu'minina fi dhālika 'l-baladi law wujida maḥṣan. maḥṣan は、〈送場〉、〈避難所〉の義（コーラン, IV 120）。この意味から転じて、〈拠所〉、〈有益なもの〉、〈意義あるもの〉の意となる。本文は maḥṣan al-umma（人民の拠所）のように、al-umma の字を補うべきであろう。つまり、「人々の拠所として、彼が見出されるならば」の意。[ZV] 11 は、この部分を Wenn es nur möglich wäre in diesem Lande die Bekehrungsmission namens des Fürsten der Gläubigen zu führen……と訳した。iḡāmāt al-da'wāt については、[註] 6 を看よ。

39) qablat min al-kuffār.

40) 写本の本文に続く箇所は、[Y], II 484-5 (Khuwārizm) に引用されている。しかし、[X] は [IF] の報告書中、バグダードを出発してからホラズムに到るまでのイスラーム圏内の記事を全く引用していない。[Y], II 484 は、「彼 (Ibn Faḍlān) は、ボハラに着いた後のことを、“さて、われわれはボハラを立ててホラズムに向い、さらにはホラズムから al-Jurjāniya まで——両地の間は水行で 50 ファルサフ——河を下って行った (inḥadarnā)」、と語っているが、この点について私は次の様に解します。私は、ホラズム [の町] と言う呼び方には全く承服出来ません。なぜならば、ホラズムとは、疑いもなく地域名 (ism al-iqlīm) だからです」とあって、ここで始めて [IF] を引用する。

41) muṣayyafa.

42) riṣṣ.

43) zuṣuf (zayf).

44) al-ṣayrafi.

45) ki'ab (ku'b). 〈タイコロ〉の意か。

46) al-dawāmat (?). [Y], II 484 の duwvāmat (duwvāmat) によった。しかし al-dawāmat (al-dawāt) と読めば、〈インクつぼ〉の意となる (Kazimirski, I 756)。

47) 此処は、[AT] ([ZV], 125) に次の様にある。「ホラズムは恵まれた地方である。そこに住民は、敬虔 [なイスラームの信徒] であって、榮譽高く、勇ましい (moravāt)。しかも彼らには才幹と威厳がある。そこは酷寒の地である。そこの人達は軍人であって、

決して [他人を] 叩打するようなことはやらない。彼らは、正当な場合を除いては [maḡar be-'adal], いづれの王を載くことにも満足しない。その大都市は、Jurjāniya である。ホラズム語は難解であって、その言葉の多くに Z 音が現れる。そこには、もう一つの町 Ardiakar (Ardak) があるが、その言葉 [もまた] 難しい。彼らは敬虔信徒の長 'Alī を嫌悪している (doshman)。[その地方の] 寒さは、殊更に厳しく、杖に置いた頬が凍りついてしまい、大木が引裂ける程である。そこで、彼らは人がやっとの思いで馬に乗ることがのできる程も服を着込んでいる。ホラズムは、マウランナフルと境を接し、ジャイフーン河は、ホラズムの境を通り、ホラズム海(アラル海)の岸辺 [近く] にある山麓に向って流れている。[その河は] 夏になるまで凍結している。ジャイフーン河と Shash 河とは、[共に] この (ホラズム) 海に流入する。ホラズムには東側面は随処にあって、クルミの木はない。ホラズムの人達は、旅行好きである。彼らはグズ嶺に対して優勢を占めている。ホラズムの地には、寶石の鉱山は一つもない。ホラズムの商品には、ビーバー [の毛皮]、鯨 (mahishor), 乳押用の軟物、上被 (kat) がある。アッラーフこそがもっとも御存知。この文の一部は、確かに [IF] に依ったと思われるが、その他は [AT] 自身の挿入であろう。此処は [Y], II 484 には、「彼らは鹿より、狼よりも最も粗暴な人達である。彼ら (ホラズムの人達) の会話は、どこか蛙の鳴声に似ている。彼らはいつも乳押の最後に唱える 敬虔信徒の長, 'Alī b. Abu Ṭalīb を省く」とある。[Y] は、[IF] の本文を著しく簡略に引用したため、本来の文意を正確に伝えていない。即ち、[Y] に依れば、蛙の鳴声に類似の語彙は Ardaku の人達ではなく、ホラズムのものである。

48) [Y], II 484 には、〈19 シブル〉とある。

49) [Q], 536 (Khuwārizm) は、此箇所を引用しているが、次に見るように、写本の本文は見当らない詳細な記事が記されている。しかし [Q] が現存のマッシュハド本と別の版本を利用したとは考え難く、むしろ [Q] による挿入かと思われる。つまり、[Ibn Faḍlān] は彼の《報告書》の中で次のように言っている。「私がジャイフーン河を見たとき、すでに河は 17 シブル [の厚さに] 凍結していた。アッラーフのみその真実を御存知。そして氷の下の水の残っている部分では、なおも水溜がある。ホラズムの人達は、御嘴 (ma'awil) を使って氷の部分まで氷に穴をあけて、丁度、井戸から水を汲むと同じようにして、彼らの飲水をその穴からとり、水壺に入れてはこぶ。その河がもっとも凍結すると、その氷上をキャラバン隊や家畜に牽かれた荷車が渡る。河と地面との間の境目は、はっきりしない。砂漠の中で見るような埃が氷の上にある。そのまま [凍った] 状態が 2 カ月間つづき、厳しい寒さが和らぐと、氷は最初、徐々にばらばらになり始め、終には、もとの [水の] 状態に戻る。その河は、人が一たび濡ればほとんど助からない程恐ろしい河である。」とある。

50) bal min al-zamhar. コーラン, LXXVI 13 には「みなそこで(樂園の中で)臥床に少たり身をのばす。そこではもう均けつく太陽にも、来る寒気にも震われずにすむ」

とある。

- 51) [Y], II 485 は、此処の [IF] の説明は誤りであると述べて、次の様な註釈を加えている。「これもまた誤りである。なぜならば、冬の間ずっと彼らの国の気候が変らない(和らがない)としたならば、誰一人としてそこでは住むことができないであらう。」
- 52) 写本の *yatubaddathu* は *natubaddathu* に改める。
- 53) [X], II 485 には、次いで *al-fagh wa-huwa al-ghuḍa* (ターグ、つまり薪木) とある。
- [X] に依る説明文と考えられるので採らない。
- 54) 此処の本文に続けて、[Y], II 485 には、「そして何かをめぐんでやると、それを受取って、そこで初めて外に出て行く」と言う加筆が見られるが、訳文では省いた。
- 55) この後に続くホラズム地方の寒さ、トルコ国へ出発の準備、グズ・トルコ族、ベチェネグ族などに関する記事は、[Y], [Q] には見えない。[註] 92 参照。
- 56) 即ち、西暦 921 年 11 月から 922 年 2 月までである。
- 57) 写本には、*wa-laḡad balagħani anna iḥna 'ashara jamalan li-yuḡmilla 'alay-ha baṭaban* とあって、*anna* と *iḥna* との間に数語の脱字があると考えられる。[ZV], text 8 は *raḡulayni sāḡa* と 2 語を補った。訳文は [ZV] に依って訳した。つまり、マシェハド本の写字生は、く 2 人 (iḥnay) と く 2 人 (iḥnay) と く 2 人 (iḥna ashara) との 2 つの *iḥna* を見誤ったために中間の文を書落したとも考えられる。[K], 175 n. 125 及び [Cz], 236 参照。
- 58) *qaddāḡa wa ḡurāḡa* (*ḡurāḡa*)。
- 59) 写本には、*li-hawā'i bardī-ha* とある。[Cz], 236-7 は、これを *li-ihra'i bardī-ha* (その国の肌を刺すような寒さのため) と改めているが、写本通りに訳した。
- 60) [D], 85 に依って、*ḡatū kuntu uḡḡu-bu-ha ila 'l-nari* とするのが正しい。[ZV], text 8 は、*ḡatū kuntu uḡḡu-bu-ha ila 'l-nari* (私が火のそばで靴を溶かすまでは) と誤んだ。
- 61) *fi bayti jawfi baytin*. [ZV], 15 n. 1 は、*jawf bayt* の *bayt* を *dar* (敷地) の意と解しているが、此処の本文はホラズム地方の厳しい寒さに重及しているものであるから、両方ともに〈家〉の意であらう。[ZV] の説は使い難い。即ち〈家の中の家〉、〈二重の家〉の意と思われる。
- 62) *qubba*. 〈テント〉の意。本文中ではトルコ製の〈テント〉は主として *qubba* と記されている。Yā'qubi, 235 参照。[註] 91 を看よ。
- 63) *wa-laḡad kuntu anāmu fi* と誤む。[Cz] 237 ([R] 106) は、*wa-laḡad kuntu ayyāman* *fi* (私は、数日間、……の中に居た) と写本を改めている。写本では確かに *wa-laḡad kuntu AYaM* (*ayyām*) と読めるが、ここでは [D], 85 に依って訳した。[K], 176 n. 130 参照。
- 64) *al-aksīyat wa'l-iray* (*farya*). [K], 176 n. 131 a 参照。
- 65) *al-bustnat* (*bustn*). [ZV], 16 n. 5 参照。
- 66) *al-jibab* (*jubb*). 〈井戸、くづ〉の意ではなく〈水槽〉と訳した。[C], 63 n. 84, [K], 176 n. 131 b 参照。

67) 西暦 922 年 2 月 16 日。

68) 写本の *li-'uyun*(?) は、*li-'ubur* と改める。

69) *al-sufar min juludi 'l-jamali*. *sufar* (*sufar*) は、*safinat safariyat*, つまり 〈旅行用船用の舟艇〉の意。[註] 147, と Dozy, I 653 参照。

70) *al-namaksudh*. ペルシヤ語の *namak sud*. Dozy, II 726 参照。

71) *al-istikḡār min-ha*.

72) 此節所は、*wa-hawwatu 'alay-na 'l-amra wa 'azzamū 'l-qīssata* と誤む。*hawwala 'amra* も *'azzama 'l-qīssata* もほぼ同義と思われる。[Cz], 237-8 は、*'azzama* なる語には、「人に企ての危険なることを知らせる(見せる)」の意 (Dozy, II 142) があることに依って、写本の本文を「彼らは、われわれにそのことは恐ろしいことだと説明して、事柄の危険についての注意を促した」と訳している。つまり「事柄を大義に説明することによって、相手を嚇し、その危険なことを充分に悟らせる」の意と解せる。

73) *burnus*.

74) *saṭawil taq*.

75) *mubattān*.

76) *rān*.

77) *khuff kaymakki*. Kaziminski, II 928 参照。

78) 以上の箇所は *Ibn Baṭṭūṭa* が述べている次の一文と非常に類似している。カスビ海北部、ブルガール、ルーナスなどに関する *Ibn Baṭṭūṭa* の記事は彼自身が旅行して得た知識と、ブルガール、おそらく *Ibn Faḡḡān* や *Abu Ḥamid* の報告に依ったものと思われる。つまり「時まさに厳寒のころであった。私は毛皮のコート 3 枚、2 枚のズボン、それも一枚は裏つきのものをつけ、足には羊毛の靴、さらに麻布をはいた靴、その上から *al-buḡḡāli* [という] 狼 (*dhi'b*) の毛皮をはりつけた靴をはいた。私は、いつも火のそばで湯をつかって身を清めたのだが、またたくまに水滴は氷片になって落ちて落ちた。顔を洗うときも、水が鼻についていると、凍りついてしまい、ふるうと雪のようにになっておちた。鼻水は鼻に凍りついてしまった。私はあまり着すぎて、[一人では] 馬にのることも出来ずに、仲間におしあけてもらった」(*Ibn Baṭṭūṭa*, 356) とある。

79) 此文に依って、バグダードを旅立したとき、使節一行の中には、ファキーフとムアッリム各一名が含まれていたことが分かる。

80) *siḡ la-hu*. *hu* は *Susan* を言う。

81) 写本には、*Fāris* とあるが、前出のサカーリバ使者 *Bāris* の誤写と考えられる。

82) *malik a'jami*. ここでは〈サカーリバの王〉を言っている。

83) 写本には *Falus* とあるが、[ZV], 17 n. 5 は、これを *Qlawus* (*Qulavuz*)、つまりトルコ語の *qlawuz* (ガイド) と改めた。

84) 西暦 922 年 3 月 4 日。

85) *Khabab*(?) と記されているが、一般には *Jit* (*Muqaddasi*, 287), *Khabī* (*I. Hawqal*, 352,